

の辻々へ出した。それを見た彼の老人、怒るまいことか、直に一休のところへ出かけて往つて、前の證文をつきつけ、三界の大導師ともある出家の身が、證文を反古にするとは、何といふ不埒なことぞと怒鳴りつけた。一休は極めて平氣なもので、「イヤなに、口授しないといふ證文は入れたが、書授しないといふ誓約はしたことがない」とぬけられて、老人忌々しくはあるが、その上の責めやうも一寸胸に浮ばなかつたので、ぶつ／＼言ひながら、そのまゝ歸つたといふことである。何事によらず、世間のためになることなら、少しは無理なことをしても、これを弘めやうといふ彼が精神は、誠に尊いことであると思ふ。

#### 二十四、雀の死活

或る生意氣な男が、雀を一羽掌に握つて、一休のところへやつて来て、和尚さん、この雀は生きて居りますか、死んで居ますかと尋ねた。若し一休が、生きて居ると言つたら、握り殺してしまはう、死んで居ると言つたら、逃がしてやらう、さて何と返事をするであらうかと待ち構へて居ると、一休それを察して、

たゞ一語「無」と答へたばかりなので、その男挨拶もせず逃げ去つてしまつた。其後一休、事のついでに、彼の生意氣男の宅に往き、その敷居をふみまたげたまゝで、その男を呼び出し、「どうぢや亭主、愚僧は今、この敷居を出るか這入るか。その男何の答も出來ず、たゞ手を拍つて笑つたといふことである。

#### 二十五、一休の臨終

一休和尚の末期の句であるとして、世間に傳へられてあるもの一二にして足らないが、或る處の自畫自讃に、

朦々而三十年、淡々而三十年、朦々淡々六十年、末期晞養捧梵天、  
そして後に、

借用申昨日、返濟申今日、

借置し五つのものを四つかへし本來空にいまそもとづく

又或る處に藏せる自畫自贊には、長髮蓬々として眼を屹と開き、うす赤き衣を着け、丸竹の杖をつき、ゐすに腰を打かけたる姿で、その贊は、

柳は緑、花は紅。



行脚事畢 今日時節 折主丈子 燒六月雪

虛堂之再來天下之老和尚一休宗純末期書之

是の如く種々相異つては居るが、兎に角、彼が尋常の人でなかつたことは、想ひやられるのである。

題茶釜 (諸國物語)

有口不言全體圓、不離色相絕諸緣、併吞大海江河水、吐出趙州一味禪、

題黃鶯

鳥亦說經似度他、樹頭樹底妙音多、林間花若諸菩薩、中有黃鶯小釋迦、

題蚤

垢邪塵邪是何物、元來見來更無骨、雖為人咬十分肥、瘦僧一抓沒生涯、

題虱

獨臥寒衾患幾千、餘身貧極有誰憐、夜深依被半風食、天至曉鐘未作眠、

贊兒文殊

看書忽忘七佛師、雲鬢霧鬢少年姿、手中經卷是何字、定有愁人小鬪詩、

贊大鼎

大鼎尊天其面臉、諸人信仰置棚陰、平生愛鼠是何事、足下平蕪無用心、

歲旦

有錢有酒有金銀、今歲初成大德人、富寺他山若僧達、未申案內往來頻、

### 第十章 歸 結

後小松天皇の胤でありながら、宮中で産れることも得せず、少壯にして、時の宗教界の腐敗墮落を慷慨し、これが革新に手を染めやうとして、また失敗したところの彼一休は、一時厭世の淵に沈まうとして、辛くも樂天の境に歩を轉じた。幼い時から、機智には富んで居たが、どちらかといへば、まじめの方であつた彼一休は、こゝに至つて、滑稽洒脱、風流無礙の奇僧となつた。されど彼は、厭世の極、捨鉢的樂天主義の人となつたのではない。彼自身は、常に向上一路の光明を直觀して、一步一步、理想に向つて進み近づいて居たのである。又一切衆生を濟度しやうがためには、五十有餘年の間、席暖なるの暇がなかつた位である。

既に時の天子の御子である、縦令、どんな事情があらうとも、母子二人が、安々と生計を營む位の事は、出來たであらう。又、縦令、佛門に入つたとしても、學資に困つて、香包を作るといふやうなことで、しなくともよかつたであらう。



又、縦令、貧窮苦學は已むを得なかつたとしても、當時さ程でもない凡僧が、堂々たる大寺の住持となり、紫衣を賜はり、師號を諡られたことに比べて見れば、彼が學の識の徳を以てして、しかも尙八十有餘歳の高齢に達して、纔に大徳寺の住持たるべき勅請を拜し、歿後また何等の恩典にも浴しなかつたといふものは、如何にも權衡のとれない話である。勿論、彼一休にして、若し尋常一様の俗僧であつたならば、一身の榮達を計るがためには、隨分、宮中へも押かけて行つたであらう、柳營にも出入したであらう、壯年にして早く既に大寺の住持ともなり、紫衣の僧ともなり、師號を諡つて貰ふ位の事は、苦もなく出来たであらう。否、皇胤たる彼一休にして、若し些子でも、そういふやうな考があつたならば、望んで得られないといふことは、なかつたかも知れない。しかし、彼は、時の臨濟僧に對しては、縦令それが、先輩であらうが後進であらうが、隨分手ひどく攻撃もし、喧嘩もし、現に彼が五十一歳の時には、舜日峰(大徳寺第三十六代)の入寺を拒まうとしたり、五十三歳の時には、日峰の徒太平を喝破したり、六十一歳の時には、法兄たる養叟和尚(大徳寺第二十六代)と大喧

嘩をしたり、六十四歳の時には、春浦和尚(大徳寺第四十代)を痛罵して、その徒から害を加へられやうとさへしたことがあるといふやうな工合で、従つて彼等のために、憎まれ嫌はれ怨まれたといふやうなことも、多少彼が榮達を妨げたかも知れない。然り、勿論それも一原因であつたであらうが、實は彼は、當時の一般宗教家としては、餘りに見識が高すぎ、餘りに弘法の念が強過ぎて、そんな師號だの紫衣だのといふものは、彼の眼中になかつたのである。これを以て彼は、高名利達を糞土と見、富貴榮華を浮雲と眺め、一簣一笠に甘んじて、専ら化を四方の群生に布いたのである。即ち彼は、

名利と申すは、其身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、  
堂塔を建立し、時の富貴におごれり、かくの如き人を、佛はふかくきはせ  
給ふ。

といひ、

へつらひてたのしきよりもへつらはで貧しき身こそ心安けれ  
といひ、



迷道衆生劫外愚、人々涙不識窮途、諛官只願佳名發、眞善提心一點無、  
といひ、

昨日俗人今日僧、生涯胡亂是吾能、黃衣之下多名利、我要兒孫滅大燈、  
といひ、恩師華叟が掩光二十年の後、大機弘法禪師號を勅諡せられし時、養叟  
和尚に寄せた賀詩に、

曾謝塵寰五十年、芳聲美譽是何禪、子胥日晚倒行去、靦面辱屍三百鞭、  
懶瓚辭詔也何似、猥芋烟鎖竹爐裡、大用現前眞衲僧、先師靦面潑惡水、  
といひ、又臨濟曹洞の善知識が、食欲熾盛なのを見ては、

米錢膝下露堂々、辛苦沈淪萬劫腸、賊智不妨過君子、德山臨濟沒商量、  
と言へるが如き、當時權貴の門に出入するを以て、誇りとし、利欲の念の長じ  
て居た臨濟僧とは、頗るその撰を異にして居たのである。

彼は、この見地から、社會の根本的改善を計らうとした。一面、時の社會の腐敗  
墮落を救済して、これを道徳的に改善しやうと企て、一面、更にその根本に溯  
つて、道徳の扶殖は、結局信仰問題の振作にありとし、頻りに布教傳道を試み

たのである。而して社會を根本的に改善し、信仰問題を振作するといふ段に  
なると、何時でも第一に邪魔になるものは迷信である。虚儀形式である。人の  
心に迷信の波の立ち騒いで居る間、人の行が虚儀形式の繩で縛られて居る  
間は、到底改善の實は擧がらないのである。若し夫の迷信を勦絶し、虚儀形式  
を破却し得むか、社會の改善は、こゝにその半に達したものと云つてもよい。  
今彼一休は、果して如何にして、社會の根本的改善を爲さむとしたであらう  
か。果然、彼はまた、この迷信の排斥と、虚儀形式の破壊とに向つて、まづその手  
を下した。即ち彼は、人が死後の追善供養によつて、成佛するとかしないとか  
思惟せることの迷妄なるを見て、

追善にあうた佛が盆棚へ年々くればうかむせはなし  
と一撃し、又當時、京都の諸寺から、毎年七月十四日に、宮中へ盆燈籠を献納す  
るといふ、虚儀形式の甚だ愚なるを厭ひ、

精靈今日出來迎、雨露直供萬葉棚、挑得燈明天上月、松風流水讀經聲、  
と喝破して、遂にこの、朝廷に對する年來の恒例を廢するに至らしめた。第九



章「一休の逸話第七參看」ところが、この事を聞きつけて驚いた有象無象が、一休のところへ押かけて来て、盆燈籠や精靈棚の用無用を詰つた。一休答へて、「イヤ〜大きな精靈棚が飾つてある、ドレ見せてやらうか」と、一同を鴨川の邊まで連れて行き、川の彼方を指して兩手を擴げ、「それ見よ、彼處ぢや〜」。

山城の瓜や茄子をそのまゝにたむけになせや鴨川の水

「この國中の瓜や茄子を精靈棚に見立て、この鴨川の水を手向の水にしやうではないか」と言つて、哄笑一番したといふことである。たゞこれ僅に一例にしか過ぎないが、此くの如きは、實に彼が慣用の手段であつて、毫も珍とするに足らないのである。

又彼は、常に自由討究の主義を唱へて、學徒に告げ、古則經論の教權に盲從し、徒に坐禪觀念しても、勞して功なきことを説いて曰はく、

凡參禪學道、須勦絕惡知惡覺、而至正知正見也、惡知惡覺者、古則話頭經論要文、學得參得、坐禪觀法、勞而無功者也、如是之輩、當代四百四病一時發、爲人所辱、是情識之血氣也、對閻老面前、有甚伎倆乎、獅子尊者、斷頭、白乳顯露、分明也、

正知正見者、日用坐、斷涅槃堂底工夫、全身墮在火坑、子細看之、苦中有樂、若能見得、不味撥、無因果境、若見不得、永不成佛漢、可懼々々、

と、由來、禪宗は、佛教各宗の中でも、最も自由討究的の態度を執るものではあるが、法要や、御祈禱や、俗權のために願使せらるゝとの外に、餘り能のなかつた當時の臨濟宗中に在りて、尙且この言を作したのは、以て彼の偉なりしことを證するの、一材料とするに足るではなからうか。

又彼が、未來主義に反對して、現世主義を主張するに努めたること、その勢頗る旺なるものがある。まづ彼は、世人がやゝもすると、我が身はわるきいたづらものなりと思ひつめて、偏に佛陀の大悲を仰がうとするのを嘲つて曰はく、

つくり置く罪の須彌ほどあるならば、閻魔の帳につけどころなし

世の中に慈悲も惡事もせぬ人は、さぞや閻魔も困り給はむ

痛快の言、吾人は、血湧き肉躍るの感を禁ずることが出来ない、更に未來世を非としては、



本來もなきいにしへの我なれば死にゆく方も何も彼もなし  
 死して後いかなるものとなりぬらんめし酒だんご茶とぞなりぬる  
 といひ我以外に佛といふものを認め、その力を借らうといふが如き、意氣地  
 なしを罵つて、

元の身は元のところへかへるべしいらぬ佛をたづねばしすな  
 ゆく水にかすかくよりもはかなきは佛をたのむ人の後の世  
 佛とて外にもとむる心こそまよひの中の迷なりけれ

と叫び、地獄を恐るゝ呆氣者を見ては、

みな人の貪瞋愚痴の悪水は三途の川の流とぞなる  
 六根につくる罪過のちりほこり四手の山路の高根とぞなる

鬼といふおそろしきものはどこにある邪見の人のむねにすむなり  
 と叱りつけ、更に現世主義の眞面目を吐露しては、

世の中は食うてかせいでねて起きてきてそのあとは死ぬるばかりぞ  
 と言つて居る。然り、實に人世は、食うてかせいで寐て起きて、きてそのあとは

死ぬるばかりである。されど、こゝに注意しなければならぬのは、物質的盲  
 目的の現世主義と、吾人の謂はゆる現世主義とは、似て非なるものであると  
 いふことである。前者は、たゞ社會目前の利害を見るのみであつて、永遠の理  
 想的發展を認めないところの短見であるし、後者は、即ち自己の活動、社會の  
 進化の上に樂天を觀じ、死と共に個性は絶滅するけれども、又更に社會的永  
 遠の生命があるといふことを確信し、この立脚地に腰を据ゑて、進修不息、以  
 て理想の活現を期するといふのである。今この一休の現世主義も、また夫の  
 淺薄なる物質的現世主義ではなくて、深遠なる理想的現世主義であること  
 は、言ふまでもない。

又世には、人間を以て、つまらないものである、意氣地のないものであるとし  
 て、たゞ一も二もなく、神に絶り、佛に頼らうとするものがある。その誤れるこ  
 と、殆ど言ふを價しないが、一休はまた、これをも見逃さず、攻撃して居る。ま  
 づ彼はその汎神觀を歌つて曰はく、

あめあられ雪や氷をそのまゝに水と知るこそとくるなりけれ



吾人人類は、即ち唯一絶対の顯現であつて、

雨あられ雪や氷とへだつれどおつればおなし谷川の水

絶対は、即ち吾人人類のすべてである。こゝに於て、

釋迦も又あみだもとは人ぞかしわれもすがたは人にあらずや

といふ。大覺悟に到達するのである。夫の人生問題といひ、心靈問題といひ、何と言ひ、彼と言ふ、悉くこれ自分の力を傾倒して、解決すべきもの、我以上に佛を仰ぎ、我以外に神を求むること、畢竟何等の妄想ぞ。彼乃ち曰はく、

我心そのまゝ佛いき佛波を離れて水のあらばや

夜もすがら佛の道をたづぬればわがこゝろにぞたづねいりける

成佛は異國本朝もろともに宗にはよらずこゝろにぞよる

と。よく這般の消息を傳へ得たものと言ふべきではないか。

以上の外なほ、一休の見識の、頗る卓越せるものあることを見ることの出来る一事がある。言ふまでもなく、宗教は、信念を生命として、人の心靈界を支配すべきもの、政府の保護を哀請したり、政府の勢威を假つたりすべき筈のもの

のではない。若しどうしても、そんなものゝ力を借らなければならぬと言ふやうになつては、最早、その宗教は死滅に近づいたものである。まして、これによつて虎威を借る狐もどきに、他宗他派に當らうなどゝは、言語道斷沙汰の限りである。然るに、一休は、當時、權勢に阿附してその威を假り、時の政治に容喙し得るを以て、無上の榮譽と心得たる臨濟の僧侶の襲に倣はず、全然俗權の保護干渉を避け、銳意熱心、社會の下層に化を布いたのは、流石に偉僧の行といふべきではあるまいか。

此の如く、彼一休は、眞摯熱烈なる信念に鞭つて、平民的教化に従ふと共に、社會の改善を忽にしなかつた。迷信の排斥、虚儀形式の破壊にも力を致した。而して其自由討究主義を主張しては、教權の重んずるに足らないとを教へ、現世主義を説述しては、未來生活を難じ、汎神觀の立脚地よりして、一神の存在を非認し、且、政治の保護干渉をも之を歡ばなかつたといふに至つては、その見解の、頗る吾人のそれと、相一致する者があるに驚嘆するのである。

吾人の見解とは何であるか、吾人は、今を距ること六年の前「新佛教徒同志會」



といふ一團體を組織して六條の綱領を發表した。

- 一、我徒は、佛教の健全なる信仰を根本義とす。
- 二、我徒は、信仰及道義を振作普及して、社會の改善を力む。
- 三、我徒は、宗教の自由討究を主張す。
- 四、我徒は、迷信の勦絶を期す。
- 五、我徒は、從來の宗教的制度及儀式を、保持するの必要を認めず。
- 六、我徒は、宗教に對する、政治上の保護干渉を斥く。

蓋し、現代社會の腐敗を慷慨し、現代宗教の墮落を痛憤し、これを洗滌し、これを救済しやうといふ、一片耿々の志の露現したものである。今此の明治の聖世を以て、足利時代に比するの、頗るその當を失するのであるが、闇黒であつた足利時代に於て、一休の如き偉僧の誕生を要したやうに、明治の現代社會には、『新佛教』が興起しなければならなかつたのであるか、否、明治の現代社會に、『新佛教』の興起したやうに、闇黒であつた足利時代には、一休の如き偉僧の誕生を要したのであらう。

## 附記

世間に流布して居る一休和尚の事蹟には、随分甚しい誤謬のあるといふことは、前既にこれを述べたのであるが、今その重なる二三の事柄に就いて、愚見を述べて置かうと思ふ。

### 一、一休と大徳寺

一休和尚と言へば、誰でも直ちに、紫野の大徳寺を想ひ起し、彼が出家の始めから、ずつと大徳寺に居通したもので、もあるかの様に考へて居るらしいが、それは甚しき誤りである。彼が一廉の僧侶となつてからは、大徳寺内の如意庵に住したこともあり、又彼が師匠の華叟や、法兄の養叟などが、大徳寺の住持となつたところから、自然大徳寺とは深い關係もつては居たが、彼が大徳寺の住持となり、『大徳寺の一休』と言われることの出来るやうになつたのは、實に彼が八十一歳の時である。それとも、たゞ名前ばかりの住持であつて、絶えずそこに居たといふ譯ではない。現に彼が終焉の地さへ、大徳寺では



なくて、薪村の酬恩庵であつた位である。酬恩庵について因に記す。元來一休は一簣一笠、身は行雲流水のごと定まつた住家もなく、又永く一所に停住して居たのでもない。たゞ所々方々駆け廻はつて、専ら平民的教化に従事して居たのであるが、その中でも、山城薪村の酬恩庵は、餘程氣に入つて居たものらしく思はれる。この酬恩庵といふのは、大應國師が開かれた、妙勝寺といふ名刹の境内の一小庵であつて、最初この庵に何か怪しげなものが時々出るとかで、誰が住持になつても、其夜のうちに居なくなるといふ始末、村のものも困つて居るところへ、一休が往つて、だん／＼詮索し、庵の椽の下に、金瓶が三個埋めてあつたのを發見し、それを然るべく分配して、この庵を立派に建て直し、一は先住追福の意をも表し、一は自分の住居としたのである。こゝにいふ因縁もある上に、都離れて居るから、當時世の中のとさくさの影響もなく、殊に風景も好いので、屢々こゝに錫を留めるに至つたのであらう。

## 二、一休と養叟

一休が六歳の時に、大徳寺の養叟和尚の弟子になつたといふのが、普通に信

せられて居る事實であるが、これも殆ど辨明を要しない程の著しい誤謬である。彼が六歳の時に、安國寺長老像外鑑の侍童となつたといふことも、十三歳の時に、慕詰攀公に詩を學んだといふことも、十七歳から五年の間、清叟仁藏主と爲謙翁とに就いて研鑽したといふことも、二十二歳の時から、江州堅田の華叟に就いて苦學したといふことも、一點疑ふべからざる事實であつて、殊に養叟も一休も、共に華叟の弟子で、たゞ養叟は一休の法兄であつたと言ふだけである。一休が廿六歳の時、養叟が華叟の像讚の事から、ひどく華叟の怒を招いた時に、一休がとりなして、華叟をなだめ、養叟を警めて、兄能く膽を嘗めて忘るゝこと勿かれと言つたのも、『延寶傳燈錄』に、華叟の法嗣として六人を挙げ、その第一が養叟で、第二が一休としてあるのも、共に彼等が法兄弟であつたといふことを證するに足るのである。そして、華叟は、養叟よりは寧ろ一休を愛し、一休を信じ、一休に望を屬して居た。それは、華叟が一休に興へた夫の遞代の券の奥書に徴してもわかるし、又一休が廿九歳、如意庵で三十三年忌齋を行つた時に、光日照といふものが、華叟を尋ねて來て、和尚百年の



後法を付するは誰人ぞや」と問ふたら、華叟が「風狂といふと雖も箇の純子あり」と答へたことに徴しても、知ることが出来るのである。又一休と養叟とは、その年齢が僅に十八歳しか違つて居なかつた。これを坊間傳へられて居る、夫の白い長い眉で、テラ／＼ひかつた頭の大徳寺養叟老和尚が、六七歳位の小坊主の一休と、魚の引導の掛合をする繪なんぞに考へ比べて見ると、たい噴飯に堪へないのである。

### 三、一休と義滿

一休がまだ小坊主の時に、大徳寺の養叟和尚が、時の將軍義滿のところへ連れて行つて、義滿が一休をして、衝立に書いてあつた虎を縛らせるといふ話などは、一休の事蹟中、最も光輝ある部分として、語り傳へられて居るのである。しかし、小供の時には大徳寺に居なかつたといふことも、又養叟和尚の弟子ではなかつたといふことも明になつて見ると、この話も、半分は嘘といふことになる。しからば義滿將軍に面謁したといふのは、事實であるかどうかを吟味して見るに、一休が義滿に謁したといふことは『野史』にも出て居て、そ

の一休の傳の中に、

應永十八年、見大將軍足利義滿于僧仁清室、

とあるが、しかし、足利義滿は、應永十五年に薨去になつて居る。十五年に薨去になつた義滿に、十八年に面謁するといふのは、勿論受取れない。こは定めて、何等かの間違であらう。して見ると、義滿に面謁したといふことまでが嘘であるといふことになつて、従つて畫虎を縛るといふ面白いお話も、種なしになる譯である。

ところが、『一休年譜』には、一休が十八歳の時、顯山相公が清叟仁の庵室に到り、その時一休が始めて相公に謁したといふやうに記してある。本書第五章六十一頁參看顯山相公とは、即ち足利義持の事で、『後鑑』義持將軍記第十七(應永十八年)十二月の記に、

是月將軍家渡御仁清庵室、僧一休拜謁、

とあるのを見ると、これはどうしても、義持將軍に謁したといふのを正しいとしなければならぬ。それも、一休が師匠清叟仁藏主の庵室で謁したので



あつて、こちらから推参して、拜謁を許されたといふやうな次第ではない。して見ると、大徳寺の養叟和尚が、一休を連れて義満將軍に謁したといふ話は、全然無根であるといふことになるのである。

#### 四 一休の子

こゝに一つ重要な問題がある。それは一休に一人の子があつたといふことに就いてある。禪宗は勿論、肉食妻帯を禁じてある宗旨であるが、しかし、此の宗の坊さん達は、この禁戒を破ることを何とも思はないこと、實に不思議な位である。一休もまた酒も飲めば肉も食べる、随分女犯もやつたらしい『狂雲集』に、

同門老宿、誠余姪犯肉食、會裡僧喚之、因作此偈、示衆僧云、

爲人說法是虛名、俗漢僧形何似生、老宿忠言若逆耳、昨非今是我凡情、  
といふ偈さへ載つて居るのを見ても、彼が公々然として、姪犯肉食したといふことがわかる。實は當時の老宿といふやうな連中でも、随分一休そつちのけといふ勢で、姪犯肉食して居たものもあつたのだらうが、彼等はさすがに、公

々然としてこれを行ふ程の勇氣がなかつた。否、それほど正直ではなかつた。陽に、道德堅固に行ひ濟して居るやうな風をしながら、陰に、天蓋を被り、般若湯を飲み、大黒の膝を枕にするといふやうなことは、盛に行はれて居たのである。此くの如きに比し來れば、一休が、公々然としてこれを爲して、毫も憚る色の無かつたのは、寧ろ無邪氣にして、頗る諒とすべきものがある。一休の意或は、肉食妻帯の眞理を看破したるにもよるべく、或は當時の老宿等が、言行相表裏せるを諷刺せんと欲せしにもよるのであらう。

そは兎に角、一休の子の事については、

僧となり、名を紹偵、號を岐翁と言つたといふこと。

攝津の櫻塚、及び堺に居たといふこと。

明人の畫いた一休の像に、尺八聲々吹又吹、淫坊酒肆一生棲、瀟洒途轍少人踏、眼見東南竟北西、といふ讚をしたといふこと。

明應七年二月に、少納言菅原和長に、下炬偈を授けたといふこと。

明應七年に、七十二歳であつたといふこと。従つて、應永三十四年の生れで、



一休が三十四歳の時の子であるといふこと。  
 たいこれだけしかわからない。「大日本史」や「野史」にも菅原和長の「明應三年記」などを援いて、紹偵の事を書いてあるが、矢張りこれ以上の事は記していない。若し「明應三年記」といふものでも見たら、多少得るところもあるであらうが、遺憾なことには手に入らない。その母はどういふ人であつたかといふこともわからず、又紹偵が何歳まで壽命を保つて、何處で示寂したのかといふこともわからない。さりとて、全然これを抹殺するといふことは、猶更出來ない。たい、大方博雅の諸君子の、垂教を待つばかりである。

## 附 録

### 一、一休和尚行實

一休和尚母藤氏、南朝簪纓之胤、事後小松帝能奉箕箒、帝寵昵焉。后宮譖曰、彼有南方志、每袖劔伺帝、因出宮闈、而入編民家以產、師雖處襤褸之中、有龍鳳之姿、世無有識者、應永廿二年乙未、師廿三歲、初赴江之堅田、謁華叟、廿五年戊戌、師廿五歲、一日聞瞽者演妓王失寵落飾之事、忽於雲門放洞山三頓棒、因緣投機、華叟一日書一休二大字、與師爲號、廿七年庚子、師廿七歲、夏夜聞鴉有省、即舉所見、先師曰、此是羅漢境界、非作家衲子也、師曰、某只喜羅漢、而嫌作家耳、先師曰、爾是真作家也、先師欲偈、記之曰、十年以前識倩心、曠恚豪機在、即今、鴉喚出塵羅漢果、昭陽日影玉顏吟、師作此偈、乃是年五月廿日夜也、五月先師書一券、力腰疾與赴京、囑宗橋夫人、付一帖子曰、吾暮景已迫、西崦行脚在近、此帖子是靈山如意、及老僧遞代家券也、前年付純子、彼擲地拂袖去、彼之豪邁非可彊也、橋爾待彼豪氣稍屈、付託時熱、以付之、是老僧願命也、欽哉、後花園皇帝正長元年戊申、師卅五歲、六月廿七日、華叟師寂焉、聞訃倉皇拉成子、赴堅田以致祭、一七日諸徒各散、師次日亦還



京八年丙辰師四十三歲，是年當開山國師百年遠忌，師往拜，九年丁巳，師四十四歲，師暫寓源宰相館，一日心地不快，竊意謂：今佛法混亂，無具大眼目者，龍蛇不辨，邪正駁雜，纔持一紙券，則皆曰我嗣其法，浩浩如麻，賈徒之覆轍，其可不戒哉！即命相公開故篋，把遞代券，段段花擘，命相公成沅二子，於師面前令燒却了，源相外縫掖而內伽黎，久警師風，故橋夫人囑託之源相，十二年庚申，師四十七歲，六月廿日，徒門老請師入住如意菴，廿七日設先師華叟和尚一十三回之忌齋，廿九日，一偈題校割末以貼菴壁，一偈呈養叟老人，以致退席之意，包笠徑歸，乃七月朔也，嘉吉二年壬戌，師四十九歲，初入讓羽山，借民家住，有山居偈，後創尺陀寺，徙焉，文安四年丁卯，師五十四歲，龍山多故，數僧獄繫，一門心酸，秋九月，師心疾革，潛入讓羽山，將食死，事達宸聽，即降勅批曰：和尚決有此舉，佛法王法俱滅，師豈舍朕乎哉！師豈忘國乎哉！師答勅曰：貧道亦率土之一民耳，命可敢辭耶！重陽日，述九偈以示衆，月尾歸京，享德元年壬申，師五十九歲，師遷瞎驢菴，在賣扇菴南，長祿元年丁丑，師六十四歲，夏末入薪，居十餘日，細川源京兆略致外護之意，且開幕下館，迎侍甚渥，三年己卯，師六十六歲，或人賣虛堂祖翁唐本畫像，上有自贊，休子率金購，以措酬恩常住，時像猶在京，酬恩塔主夜夢瞎驢和尚得々來，翌早說夢，等子時居酬恩所，夢偶同，而不敢言，午後果虛堂像至，掛壁各拜，塔主曰：夢乃瞎驢和尚，而覺則虛

堂祖翁堂其和尚前身乎，如夢而來，不亦奇哉！等子亦說人曰：夢乃有同乎，春初領住德禪之請，疏仍表視篆之義，入而禮祖塔者三，插香大展了，次詣光日照一楫，寬正元年庚辰，師六十七歲，華叟師入滅已三十三回忌，三年壬午，師六十九歲，秋八月患痢，諸子咸曰：師逝也，師曰：吾必無恙，九月痢止，心地稍快，十三日避亂寓桂林尼寺，四年癸未，師七十歲，七月入賀茂山，寓大燈寺，臘尾歸瞎驢菴，應仁元年丁亥，師七十四歲，六月兵起，京師，八月師出瞎驢，徙東麓之虎丘，是時都下大亂，瞎驢亦燬乎兵火矣，九月朔，師出虎丘，入薪之酬恩菴，先是十餘年來，師每誡諸徒曰：兵氣其兆焉，惟京其潰焉，汝等急打辨旅裝，備於倉卒，或臻乎，作爲偈句以警之，於此人皆服師先見，二年戊子，師七十五歲，五月十五日，設大會齋，緇白來赴，妙勝酬恩，方來殆無措足地，蓋修靈山和尚一百年之遠忌也，文明元年己丑七月，西兵入薪，徑入餅原之慈濟菴，八月二日，出餅原入南京，方一宿也，三日入泉信宿，五日出泉，僑住吉浦之松栖菴，二年庚寅，師七十七歲，有一檀越，占菴坂井之上，以延師，師喜而携諸徒，徒扁其菴曰雲門，蓋以龍山雲門祖塔亂後草白，聊存其名，以擬靈光，儲存也，六年甲午，師八十一歲，二月廿二日，廣德柔仲和尚捧勅黃來，致大德住持之請，八月染瘡，月尾少間，茲年衆已踰一百餘人，師不憚曰：靈山和尚會下衆不滿百人，吾何爲乎，致有之也，八年丙申，師八十三歲，四月瘡疾少發，蔬圃有隙地，縛苜以館



柔仲和尚諸徒求扁扁曰床菜且偈以示衆臘月衆求三轉語師垂示三轉曰天霽地厚赤肉白骨逼塞乾坤底大人境界也憇三世了達漢如來禪耶祖師禪歟這兩轉語須到彌勒下生辰九年丁酉師八十四歲床菜菘南畔修竹成林宜乎納涼師每夏苦熱甚竹間構小亭刈蘆爲葺編竹爲床師乘轎子行半日消搖扁亭曰多香多福香嚴風流可慕仍作偈以題亭之側九月河兵入津廿八日監輿赴泉之小島居半月餘十月十八日發島宿安松之草舍十九日衝雨歸墨江之舊栖神主出迎驩甚月尾微恙不病而問焉十年戊戌師八十五歲二月中浣師預推如意祖翁一百年遠忌却後十又二年己酉歲也吾且暮人也急命諸徒率財營供于慈恩寺請鄰封僧尼實三月初九日也十二日出住吉浦赴薪六月捨墨江雲門于龍山欲復靈光祖塔也七月再創如意祖塔而落焉夏末再據妙勝之席披虛堂祖翁衣有偈十一年己亥師八十六歲六月新構法堂于龍山鉅材良工不期而畢具焉惟三柔仲偕來賀厦九月微恙乃愈十三年辛丑師八十八歲孟夏下浣與新龍山正門及偏門且築廢城礮銅池春舖之役徒侶汲汲然檀度響合仲夏之初成矣七月十日設齋修門成之賀儀孟冬朔瘡發三日服驅瘡之藥而瘡散矣然衰憊喘喘殆焉十又九日江刺史來謁對話如常十一月七日疾病焉水漿不入口廿一日卯時泊然如寐坐逝哺時定全身慈揚之塔辭世頌曰須彌南畔誰會我禪虛堂來也不直半錢

二、東海一休和尚年譜

後小松皇帝應永元年甲戌  
 師刹利種其母藤氏南朝管纓之胤事後小松帝能奉箕箒帝寵渥焉后宮譜曰彼有南志每袖劔伺帝因出宮闈而入編民家以產師雖處襁褓之中有龍鳳之姿世無有識者正月朔日出時出胎

二年乙亥  
 三年丙子  
 四年丁丑  
 五年戊寅  
 六年己卯  
 師年六歲投京師安國寺長老像外鑑公執童子役鑑呼曰周建鑑乃龍光鐵舟濟公之嗣也

七年庚辰  
 八年辛巳  
 九年壬午  
 十年癸未  
 十一年甲申  
 十二年乙酉  
 師年十二歲清叟仁藏主在寶幢寺前講維摩經聽者數百人師亦往預人皆目



師曰少年有老去就前程未可量也  
十三年丙戌

師年十三歲竊發遊學志出龜嶠寺天龍依東山慕詣攀公而學作詩之法每日一首為課祥球書記亦有詩名稱師有作者風時有見惠侍者諭師曰吾祖別源翁有秋風白髮三千丈夜雨青燈五十年之句子誦之必入佳境一日詠長門奉草有君恩淺處草方深之句聞者吹服

秋荒長信美人吟徑路無媒上苑陰  
榮辱悲歡日前事君恩淺處草方深

十四年丁亥

十五年戊子

師年十五歲賦春衣宿花之詩膾炙人口

春衣宿花詩曰吟行客袖幾時情閑落百花  
天地情枕上香風寐耶窳一場春夢不分明

十六年己丑

師年十六歲結制日聞乘拂僧喜記氏族門閥掩耳出堂乃作二偈呈慕詣翁翁曰今叢林頽靡非一柱可及三十年後子言必行忍以待之其偈曰說法說禪舉姓名辱人一句聽吞聲問答若不識起倒修羅勝負長無明又曰犀牛扇子與誰人行者盧公來作賓姓名議論法堂上恰似百官朝紫宸

十七年庚寅

師年十七歲中秋無月賦佳句入神始依仁清叟于壬生預于外書及經錄之講筵兼扣起倒之義清叟每應西宮夫人之請說戒拉師與往路過神泉苑小蛇出侯叟下授安陀衣為唱戒法則作馴伏狀率以為常一日師竊袖啣石塊候蜿蜒便打殺叟大美師曰俊哉此舉衲子手段舉措脫宜政若斯為謙翁唱關山宗旨于西金寺閑房杜門高風激世師往造室謙翁清叟追隨共五年

仲秋無月詩曰是無月只有明月獨座閑吟對鐵案  
天下詩人斷腸夕雨聲一夜十年情

十八年辛卯

師年十八歲顯山相公留心々宗色々革弊聞清叟壽像僭着金伽黎一日遽到菴所欲見彼像徒侶股栗師偶在菴請持幘子出迎相公立砌下赤松越州侍旁年少美丈夫也師立屋簷上欲親度與幘子於相公赤松公咄之進而出手接幘子師握其手而作阿色相公覽此像了回駕從者曰自非禪者殆不見有此舉蓋師無豪邁以之可概見也

稱光皇帝應永十九年壬戌

師年十九歲一日師遊泉涌蘭若坐有生客師問傍僧僧曰來自龍寶山中靈山派下閣黎也師乃促牀打話師謂僧曰今龍寶佛法鋪席盛開惟有曇首座一人



在其餘祿々耳，僧驚曰：子能知吾家私，師曰：吾望江源為登龍門，子能先容乎？後在江源逢着前僧，々曰：不待指南，善財在此。

廿年癸巳

師年廿歲，為謙翁一日謂師曰：五蘊已傾倒於子，然吾無左證，故不證汝，其為宿德器許如此，翁承因無因本色古衲子也。

以謙遜辭左券故無因稱謙翁

廿一年甲午

師年二十一歲，臘月為謙翁寂，致祭無資，徒心喪耳，辭詣清水寺，寺舊法自除日至上元，禁人斷穀焚誦，歸啓母氏，再詣清水寺，經歌中山，路出大津驛，驛亭人見師驂衲勃窣而挾菜色，謂曰：雖閣黎汝如何人，豈非師呵咄定後母陰辱耶，國俗歲晏家設胡餅，餅偶成焉，與師數枚喫々了，即達石山大士像前，默禱道念，堅勁無他懇焉，焚誦七日，山中有僧延師過菴，保持甚厚，洞下僧也，出其家話一百則者，需師書之，師疾書而予，彼喜出金以備旅費，一日起大士像前，遙步湖橋，竊意語吾投身水中，若得命全，則大士加被無疑，否則雖委魚腹，它日必遂所志，大士豈舍我諸將投之，頃忽母氏信使至掖而退，住曰：毀身失孝，悟道有日，勿為遲也，師不獲已，歸京觀母。

廿二年乙未

師年二十二歲，初赴江之堅田，求謁於華叟師，閉門峻拒，師意誓，吾不得一謁，決死於此矣，露眠草宿，不少屈，夜投虛舟，旦造菴前，既經四五日，叟偶赴村齋，出門見師，蒲伏門側，而顧左右曰：前日僧猶在此，急須水洒杖，遂齋退歸菴，見師猶屹不去，遂延以處置，一語投契，孳々參請，有一僧妬師資相得，讒吻數啓先師，謀師伴為之間，彼恒伺師，取炊巾入室，百計胥拒，或倩童子，以訟先師曰：每人參問，則純子必沿壁伏牀聽之，他日渠不可測，師恐未知先師，只叱逐童子，不問情主，蓋嘗使師屬牆壁之耳也，服勤凡九年，得其要領，早在三四年之速矣。

廿三年丙申

師年二十三歲，華叟會裡枯澹甚矣，齋孟不再，露江菴濱湖，漁者爭隈，師與一舟子善，夜每借其篷宿，功夫達曙，舟子憫師能耐饑寒，每設盤釘羞焉，其妻刻甚，數轆羹釜，師囊儲屢窶，歸京或製香包，及難婦彩衣，得金則徑赴堅田，旅具不設，鞋笠蕭疎，如適城市之易，然華叟師平居辛辣色不少假，一日命師對藥，指血下染藥砧，叟直視師曰：子壯大手指，軟弱如此乎，師聞此，手彌戰，叟微有咲容。

廿四年丁酉

師年二十四歲，謙岩冲公以作者鳴，與華叟師世系也，開爐有偈，呈華叟師，師和



曰展開兩手當爐處，陝府鐵牛白汗流，省師和和曰撥盡寒灰臙寂子，瀉山眼重火星流，叟誇岩曰純子避老僧一頭地。

廿五年戊戌

師年二十五歲，一日聞警者演妓王失寵落飾之事，忽於雲門放洞山三頓棒，因緣投機華叟師一日書一休二大字，與師爲號。

廿六年己亥

師年二十六歲，宗願首座繪先師像求讚，讚有願來的々付兒孫之句，願公誤認爲認可語，而稍々訓人，先師聞此震怒，忽欲把轆子來付一火，師出啓先師曰：願兄老大，久在和尙會裡，人皆知之，今遽火轆子，彼何面目之見人哉？和尙百年後，彼若漫稱券開口，則吾必橫身破斥之，勿爲慮也。先師怒少霽，因把轆子付願兄曰：兄能管膽勿忘焉。

一口吞佛祖眼乾坤，手裡竹篋天魔魂，一句語提三要印，願來的々付兒孫。

廿七年庚子

師年二十七歲，夏夜聞鴉有省，即舉所見，先師曰：此是羅漢境界，非作家衲子，師曰：某只喜羅漢，而嫌作家耳。先師曰：爾是真作家也。先師欲偈記之曰：十年以前識情心，嗔恚豪機在，即今鴉笑出塵羅漢果，昭陽日影玉顏吟。師作此偈，乃是年

五月二十日夜也，五月先師書一券，力腰疾，與赴京，囑宗橋夫人付一帖子曰：吾暮景已迫，西崦行脚在近，此帖子是靈山如意，及老僧遞代家券也。前年已付純子，彼擲地拂袖去，彼之豪邁非可疆也。橋爾待彼豪邁稍屈，付託時熟，以付之，是老僧願命也。欽哉，橋字花林，實吾門尼惣持也。蚤升如意堂，晚入華叟室，與師法友于而義骨肉也。帖子付託日，橋啓華叟師曰：吾老且獨，叟指師曰：可子以子，豈有過純哉？橋曰：奈非骨肉何？叟便問：橋爾如何是養子緣？橋曰：他家自有通霄路，叟曰：心徑，若生時如何？曰：彩鳳舞且霄純爾，如何是養子緣？師曰：鐵樹抽枝，枯木生花，曰：意旨如何？曰：滴水滴凍，曰：和泥合水時如何？曰：斬成兩段，曰：一刀兩段時如何？曰：滴水滴凍，曰：枯木再生花，橋却曰：各志言矣。願聞師志，如何是養子緣？叟曰：何似坐，曰：心徑，若生時如何？叟曰：瞎橋揖曰：有此父，有此子，其母豈不任立孤之託乎哉？

廿八年辛丑

師年二十八歲，先師腰疾不起，塊坐一榻，二利共設承器，左右輪次除穢，衆皆用簍子刷，師獨下手指，以祛雪之，曰：師翁之穢，何之厭之有哉？衆有慚色。

廿九年壬寅

師年二十九歲，十月九日，如意菴設三十三回忌齋，華叟師力疾赴會，師與俱預。



席焉舉衆道具齊整師獨布衣草屨龍鐘也華叟師顧師曰汝何無威儀師曰余獨潤色一衆蓋貶膺緇之牛裾也點心罷華叟師燕息如意之西軒先日照來謁問曰和尚百年之後付法誰人曰雖道風狂有箇純子

三十年癸卯

師年三十歲一日會堪堂面有刀瘡於土岐館館有父名象而其子曰猿者滑稽傾座堂指猿問曰象爲甚麼生猿師答曰懷州牛喫禾益州馬腹脹堂曰懷州與益州相去多少師曰天地同根萬物一體堂無語師拊背堂曰到江吳地盡隔岸越山多華叟師傳聞曰純藏主答太過於問對牛之琴不可彈也後數日又曰純藏主吾家裡人不可無此答焉

卅一年甲辰

師年三十一歲岐嶽周和尚符橫嶽祖師之遠識而領柱杖以歸爲人落魄不羈住龍山日招官寺少年而看雲亭上置酒放浪一日問師曰汝識老僧境界否答曰茂陵多病後猶愛卓文君嶽領焉乃請師題無頭勝國師識曰吾誠後一百年住此山者乃吾後身也留杖必付之

卅二年乙巳

卅三年丙午

卅四年丁未

師年三十四歲後小松帝付神器於稱光帝以降聖念特在師鍾愛愈篤故時々召對前席疊々問道譚禪大稱宸衷稱光帝將入蒼梧大寶當仁負屣不讓朕其任誰睿慮猶豫師密入奏曰杏天曆數正在彥仁王之躬時不可失勿待左右祖帝曰朕儲定矣師言良哉玉璽歸彥仁王之手則師之功績不爲不鉅多也又一日對御之次帝曰空谷性海兩禪衲本色爲誰請師擇焉師曰吾恐空谷不在性海下海文字習未脫谷名利念兩亡於是追崇空谷爲帝師諡賜佛日常光

相國佛日常光國師諡明應字空谷嘉曆三年戊辰六月廿四日生嗣天龍無極玄玄嗣夢窓國師○東福性海和尚諱靈見自號不遷子正和四年乙卯生康永元之初秋入宋嗣无關應永三年丙子三月廿一日示化八十二歲

後花園皇帝正長元年戊申

師年三十五歲六月二十七日華叟師寂焉聞訃倉皇拉成子赴堅田以致祭一七日諸徒各散師亦還京

永享元年己酉

二年庚戌

三年辛亥

四年壬子

師年三十九歲冬攜沅子遊泉時有女子名彭自殺其夫請師秉炬其語曰手裡



吹毛能死能活，小姑彭郎，一刀兩割，擲火炬於背後，赴茶毘會者，火星點衣，師一日入檀家，欄有老牛，戲書一偈，掛其角端云：異類行中是我曾，能依境也，境依能，出生忘却來時路，不識前身誰氏僧，其夜牛斃矣，翌日牛主戲師，願殺吾牛，師一咲，五年癸丑

師年四十歲後，小松帝不豫，登遐前數日，降宣召師，師密入仙院，對御候問，咫尺龍牀，畧演心要，喜見龍顏，因命侍臣發金匣，把先朝寶墨，及草飛白等數帖來，親賜師曰：朕雖在天，以此併法寶居矣，國祚陰翼，師本職，而不在朕言也，師拜稽首而去，遂以十月二十日崩，師生乎一針不著，况餘長哉，惟此墨硯寶貯小葛籠，到處相隨身，不暫離。

六年甲寅

七年乙卯

師年四十二歲，曾在泉南，每出遊街市，持一木劍，彈鋏，市人爭問，師劍以殺為功，師持此劍，是甚麼用，答曰：汝等未知，今諸方廣知識，似此木劍，收在室則殆，似真劍，拔出室則只木片耳，殺猶不能，况活人乎，人皆咲之，瑞子繪師像，曲錄牀角，靠長劍，以代烏藤，讚有吹毛三尺，發動烟塵之句。

八年丙辰

師歲四十三歲，是年丁開山國師百年遠忌，師往拜塔下一女子，戴衣囊而隨後，仍述偈以當齋供，有祖師遷化已百載，空拜婆年婆子裙等句。

囊寬青銅，無半文，翻思一句，豈驚群，祖師遷化已百載，空拜婆年婆子裙，○又兒孫多踏上頭關，一箇狂雲，江海間，大會齋，還在何處，白雲蒸飯，五台山。

九月丁巳

師年四十四歲，師暫寓源宰相館土師殿，一日心地不快，竊意謂今佛法混亂，無具大眼目者，龍虵不辨，邪正駁雜，纒持一紙券，則皆曰吾嗣某法，浩々如麻，賈徒之覆轍，其可不戒哉，即命相公開故篋，把遞代券來，段々花擘，一炬爐之，其券契曰：純藏主悟徹後，與一紙法語，道是甚麼繫驢，擲拂袖去，可謂瞎驢邊滅類也，臨濟正法若墮地，汝出世來扶起，此汝是我一子也，念之思之，應永二十七年五月日，華叟下有華字，先是帖子付託之座，沅成二子在焉，二子共伽黎也，帖子大法所係，僧恐犯其器，源相外縫掖而內伽黎，久嚮師風，故橋夫人囑託之源相。

十年戊午

師年四十五歲，銅駝坊北冷泉萬里小路有故人，小廬破垣敗簣，人不堪其憂，師樂此，而設一圓蒲席坐，非咨詢之輩，謝絕不接。

十一年己未



師年四十六歲，是年明遠智公寂，龍山宿德，知師佩華叟和尚正印，每々稱師於稠席之席，剛介不阿之先人也。

十二年庚申

師年四十七歲，六月二十日徒門老請師入住如意菴，二十七日欲設先師華叟和尚一十三回之忌齋，泉人雜還畢集于大用菴，且懷香錢賀師住菴，紛冗非素粗叙寒暄而已，二十九日一偈題校割末，以貼菴壁，一偈呈養叟老人，以致退席之意，包笠徑歸，乃七月朔也。

題校割末詩，將常住物置菴中，木杓盆籬掛壁東，我無如此閑家具，江海多年養笠風。

嘉吉元年辛酉

師年四十八歲，安衆坊之南，路小村檀後圃，草屋數楹，修竹環軒，朴野可禪，師請而燕息者一月餘，育子侍閑居次，避席啓師曰：五家宗旨已見貫花，七宗之綱領門下語，師逐一下語，育子佩服。

二年壬戌

師年四十九歲，師初入讓羽山，借民家住，有山居偈，後創尸陀寺，徒焉，徒侶慕而到者，皆爲法忘軀之流，故拾枯掬礪，岩路盤屈，汲々而勿倦，讓羽爲名，朝貢出石灰地，讓羽出灰，和訓相近，瑞子舊朝臣也，故曾熱此地，是以先容。

三年癸亥

師年五十歲，大炊御門室町畔有屋，主常不在，乃陶山公家妾宅也，閑寂宜師，陶公館師，於此日夕保護，來者屢滿，亡何辭去。

文安元年甲子

師年五十一歲，關山一派昔被攢斥以來，未嘗山中往還，况亦可鑿斧敢入其手哉，舜日峯以官命將住山，養叟和尚和會師而欲拒其入寺，師假作門看，叟假作日峯，問答數番，約彼負隨，則不許入門，師先橫棒跨門限，叟學峯來之儀，假看搗曰：自門入者不是家珍，假峯衝口曰：如何是家珍，看乃曳棒曰：吞舟之魚，不遊龍門，峯拂袖去看曰：好云西天路，迢々十萬里，師謂養叟曰：義勇旣如此，官命實不可拒也，叟撫然。

二年乙丑

三年丙寅

師年五十三歲，土州太平舜日峯參徒也，一日來謁問曰：德山入門便棒，其口未合，後句將來，師返詰曰：本有圓成佛從甚麼處來，平曰：看々，師打曰：龍頭虺尾漢，平無語，蓋雖飽參自負者，一到師面前則皆奪機含糊退，所謂無尾也，獼猴子，不消一胡蘆。



四年丁卯

師年五十四歲，龍山多故，數僧獄繫，一門心酸。秋九月，師心疾革，潛入讓羽山將食死，事達宸聽，即降勅批曰：和尚決有此舉，佛法王法俱滅，師豈舍朕乎哉？師豈忘國乎哉？師答勅曰：貧道亦率土之一民耳，命可敢辭耶？重陽日述九偈，以示衆。月尾歸京。

五年戊辰

師年五十五歲，是年假寓雙杉俗曰二小菴三五日，乃歸永昌坊口之菴。乃陶山公舊菴。暇日謂左右曰：曩日所焚之券，猶有人襲藏否？吾膺為礙，自覺有此，非他告也。瑞子啓曰：有此哉，不免出堂，披覽則糊破紙為全券，蓋諸子不忍火寶，惜囊秘，師丞呼火炬焚了。

寶德元年己巳

師年五十六歲，一日街頭逢僧，問師曰：市中有隱否？師曰：有，僧曰：如何是市中隱？師曰：何似生，僧無語，師打僧。

二年庚午

師年五十七歲，熟視諸方，邪解牛毛，正見麟角，乃自欲策己，且箴吾徒，手書規文數通，遍囑當軸在宮所人，以畏而能外護吾門者，各送一通曰：老拙生平未曾印

一人，恐吾辭世後為人口不啞，密付印不刑，或自負佛法潛作家，則不涉款案鞭撻，急須告御史獄繫，是法之姦賊，而吾之怨敵也。曷哉！護法之任，其可旁縮手觀哉。

三年辛未

師年五十八歲，興春作嘗撰國師行狀，筆無史體，具狀達官貴戚，奔趨之迹，不錄艱苦行乞，不刪之行，師補文欠，以一偈題狀末曰：挑起大燈輝，一天鑿與競譽法堂前，風飡水宿無人記，第五橋邊二十年。養叟和尚聞此，嬉笑曰：先國師可狀之行，豈必寒乞云焉乎哉？通訴一子久親炙叟者，不忍匿啞，啞叟不知言，便辭去見師，師近接厚待，頗出等伍，蓋褒其師資背馳也。

享德元年壬申

師年五十九歲，遷瞎驢菴，今在賣扇菴南，亦是陶山公所置也。

二年癸酉

師歲六十歲，師叔惟山和尚養叟和住龍山，師遣徒弟數輩，助開堂之化儀七日，舊攸為崇，鐘魚索然，惟浴堂門廡，及如意大用，僅存，養叟和尚乃毀大用，以為靈光之塔，師作題塔偈曰：草創百二十八年，看來今日體中玄，正邪境法滅却後，猶是大燈輝大千。



三年甲戌

師年六十一歲，師一日攜瑞子，特謁養叟和尚，將叙間濶諸徒諫止，師意不決，便先詣靈山真前，燒香拈闌，吾將詣大用致拜，不知祖意如何，眼拈中拜闌徑造叟，叟徒出，慢罵師，叟叱其徒退，乃延接，從容曰：「一來奉遲，近將遣价諭之，先師頭面，潑糞水公也，然吾未向他說，只對吾徒說之。」師曰：「豈不云哉？家裡人說家裡話，不向他說，非師兄恩，糞水之義，請細指陳。」叟曰：「聞公舉百丈餓死話，及靈山和尚示榮街徒法語，示學侶，先師在日，未此等語。」師曰：「吾以百丈餓死，別不立話頭，不作食之事，詳見虛堂祖翁普說，且靈山法語，先師每日苦言及其說，公其健忘乎？聞公稱非參禪，示其徒，此語先師在日未聞之，昔佐侍者參乾峯，法身話而知非，知非乃悟，豈別有非參禪耶？然則公自糞水於頭面，非于先師也。」叟作色曰：「吾手有券，公何漫議乎？」師曰：「余亦有券，非公券比。」叟曰：「吾不敢保公無券，師大笑而去，從比法券之義，永絕焉。」師已焚券於此，稱券則蓋弗違先師曩昔之一約也。冬，養叟和尚赴泉南慶陽春新菴，垂示入室，鼓簧男女，或人作偈調之。

康正元年乙亥

師年六十二歲，正月，泉南調偈傳達於師，次其韻者二百餘首，編作一卷，題曰「自戒」，師一日赴天平齋，有深首座，舜日峯之徒也，齋罷，出問師曰：「龍峯山裡龍如

何出頭，師不答而詬罵曰：「子此一問無體裁，故吾籍答口，子徐聞之，昔天明老人問靈山和尚曰：『金翅鳥王當宇宙，龍寶山裡龍爭出頭。』一問樣子已如此，子無撈人句，漫撈人乎？今天下知問答之起，倒者無一個，汝師日峯老々大々，殊不知好惡云々。」

天明居士於紫野問靈山云：『金翅鳥王當宇宙，龍寶山裡龍如何彰？』靈山答云：『開口看，明云：『胡亂長老，如麻似栗，山云：『卓上老僧梵天，明作禮退。』

二年丙子

師年六十三歲，薪之妙勝，乃大應國師之道場，而祖堂未塑遺像，僉曰：「鐵典，師募木工以安焉，薪人拜如在也。」

新造大應國師像，活眼大開，真面門，千秋後，尙弄精魂，虛堂的子老南浦，東海狂雲七世孫。

長祿元年丁丑

師年六十四歲，夏末入薪居十餘日，細川源京兆介龍安秉義天，畧致外護之意，且開幕下館，迎待甚渥，蓋此時途中逢熙藏主春浦痛罵法中姦賊，其徒欲加害於師，流言紛々。

二年戊寅

三年己卯

師年六十六歲，或人賣虛堂祖翁唐本畫像，上有自贊曰：「容易肯人，難與共語，竹



篋頭惜之如金，禪牀角委之如土，淨潭知藏善，知機電光影裡分賓主，休子敬叟也。率金購以捨，酬恩常住，時像猶在京，酬恩塔主夜夢，瞎驢和尚得々來，翌早說夢。等子時居，酬恩所夢偶同，而不敢言，午後果虛堂像至，掛壁各拜，塔主曰：夢乃瞎驢和尚，覺則虛堂翁，堂其和尚前身乎？如夢而來，不亦奇乎？等子亦說人曰：夢乃有同乎？春初領住德禪之請，疏仍表視篆之義，入而禮祖塔者三，插香大展了，次詣日照光和尙一揖。

寬正元年庚辰

師年六十七歲，華叟入滅已三十三回，師先忌齋庚，率香錢以送龍山，復往拜三祖塔，且謁日照，揖茶人事而已。

二年辛巳

師年六十八歲，春遊嵯峨，路經西京，入拜龍翔之塔，荒涼僧少，堂宇傾欹，照堂特龍山所營，而獨無恙，庫院最廢，而鼓飯瘠焉，師慨焉，率錢數千緡以新之，不日成矣。

感龍翔寺廢，偈云：常住物誰用，已身山門幾致剪，松筠殿堂只與花零落，廢址秋風二月春。

三年壬午

師年六十九歲，春戲製勾欄曲，命寧童歌舞，酒闌自舞，秋八月患痢，諸子咸曰：師

逝也，師曰：吾必無恙，九月痢止，心地稍快，十三日，避亂寓桂林尼寺。

四年癸未

師年七十歲，七月入賀茂山，寓大燈寺，臘尾歸瞎驢菴。

五年甲申

寬正五年冬至日，作虛堂讚，臨濟正傳，誰棟梁，慈明楊岐又虛堂，東海兒孫七世子，大燈室的々靈光。

六年乙酉

今上皇帝文正元年丙辰

應仁元年丁亥

師年七十四歲，六月兵起，京師兩宮駐蹕於相府，劉頂雄未可決，八月師出瞎驢菴，徒東麓之虎丘，是時都下大亂，瞎驢亦燬乎兵火，九月朔，師出虎丘，入薪之酬恩菴，一村父老皆欣々，然而有喜色，先是十餘年來，師每誡諸徒曰：兵炆其兆焉，雖京其潰焉，汝等急打辨旅裝，備於倉卒，或臻乎，作為偈句以警之，於此人皆服師先見。

二年戊子

師年七十五歲，五月十五日，設大會齋，緇白來赴，妙勝酬恩，方來殆無措足地，蓋修靈山和尚一百年之遠忌也，凡都鄙慕師風，欽師德，一承師顏者，無少無老，僉



不召來助伊蒲之供，惟恐後焉。秋書示多福菴禪竹。薪在之今法語一通。

靈山和尚百年忌，偈、僧、運、酬、恩、妙、勝、薪、靈、山、昔、日、涅、槃、辰、二、千、四、百、年、前、境、梅、雨、流、紅、五、月、春、○、又、癩、兒、率、率、伴、出、人、前、麗、魅、人、家、常、說、禪、龍、寶、山、中、辛、誠、却、靈、山、記、菊、隨、隨、邊、

文明元年己丑

師年七十六歲，夏讀松源祖師像，畫者墨谿繪靈靈見桃香嚴擊竹于佛龕障子，師一見絕倒題偈，為陳侍者作睦州織鞋圖讚。七月西兵入薪徑，入緝原之慈濟菴。八月二日，出緝原入南京，方一宿也。三日入泉信宿，五日出泉，僑住吉浦之松栖菴。此地蓋以卓然和尚甘棠遺蔭可慕，而泉津獠鄉不可居也。

贊松和尚松源靈隱老師破法攀緣有數錢，囊中我沒半文著，狂客江山三十年○又巡堂合掌又燒香，堅拂拈提座木牀，臨濟正傳也，何處一休東海斷愁腸，應仁三年夏○又日，東海純一休拜贊○見桃偶見處風流悟道心，桃花一采價千金，瑞池王母春風面，我約愁人雲雨吟○擊竹偶對畫，忽然盡誠情，道人龜鑑太分明，娘生佛見南陽境，腸斷黃陵夜雨聲。

二年庚寅

師年七十七歲，有一檀越占菴坂井之上，以延師，師喜而携諸徒徒，扁其菴曰雲門，蓋以龍山雲門祖塔亂後草白聊存其名，以擬靈光歸存也。

三年辛卯

四年壬辰

師年七十九歲，或人出小幘子，以需書牌位，即點筆書與之曰：住德禪某甲虛堂。

七世天下老和尚

五年癸巳

師年八十歲，八月行在所剝叢院，曰大德，迎開山靈山如意像于藪里，以安奉焉。祖翁三塔香火所存，豈可忽諸，乃課門客率貨泉以送矣。

六年甲午

師年八十一歲，二月二十二日廣德寺攝州尼崎柔中隆和尚捧勅黃來，致大德住持之請，不可辭也。師作二偈，且謝且警，柔中和和尚寓本色住山，祖教中興之祝，且求入寺法語，卒書而應之。八月染瘡，月尾少間，茲年衆已踰一百餘人。師不憚曰：靈山和尚會下衆不漏百人，吾何為乎致有之也。

七年乙未

師年八十二歲，薪之虎丘作壽塔而落矣。師揭軒楣以慈楊塔，且作偈示衆，其意有自也。

偈曰：不是平生好境痕，任陀鷄足月黃昏，誰氏風流我盟約，馬鬼青塚舊精魂。

八年丙申

師年八十三歲，四月瘡疾少發，五月望有人獻韻府數冊，師獲而喜甚，語左右曰：此冊曩予與華叟先師有少逆而辭去，歸京途中遇讚豎者華叟師曰：子今何之，俗姪也。



師件々縷說辭意，堅者携師歸，再謁先師，曰：來也，備辭吾出去，何爲留書無，乃眷戀之至乎，撫愛倍舊，後霜雨決旬，崖崩損菴窓，書蝕土中，冊數不全，泥痕猶存，而書卷破，此其驗也。今幸屬余，吁天哉，物歸有主，披而一覽，宛如見先師再謁時之面，仍拜書一偈於外裝紙，以爲家寶。誠諸子曰：莫散共也。蔬圃有隙地，縛芻以館柔中，和尚諸徒求扁，曰：牀菜且偈以示衆，臘月衆求三轉語，師不得已垂示三轉曰：天高地厚，赤肉白骨，逼塞乾坤底，大人境界也麼？又曰：三世了達漢，如來禪祖師禪，又曰：欲知箇兩轉語，須到彌勒下生辰。

九年丁酉

師年八十四歲，春夏無恙，牀菜巷南畔修竹成林，宜乎納涼，師每夏苦熱甚，竹間構小亭，刈蘆爲葺，編竹爲牀，師乘轎子行，半日消搖扇，亭曰：多香多福香殿，風流可慕，仍作偈以題亭之側。九月河兵入津，二十八日，籃輿赴泉之小島，居半月餘，十月十八日，發島宿安松之草舍，十九日，衝雨歸墨江之舊栖，神主出迎，驩甚，月尾微恙，不病而問焉。

十年戊戌

師年八十五歲，二月中浣，師預推如意祖翁一百年遠忌，却後十有二年巳酉歲也，吾且暮人也，急命諸徒，率財營供于慈恩寺，請鄰封僧尼，實三月初九日也，十

二日，出住吉浦赴薪，老幼遮道以慕，臻攀轅曳衣，揮淚而別。六月捨墨江雲門于龍山，欲復靈光之祖塔也。七月再創如意祖塔而落焉。夏末再據妙勝之席，披虛堂祖翁衣，有偈曰：運菴遷衣，純先留衣，截作兩毀，是松源衣。

十一年巳亥

師年八十六歲，六月新構法堂于龍山，鉅材良工不期而畢具焉，惟三柔中偕來賀慶，九月微恙，乃愈。

十二年庚子

師年八十七歲，正月三日爲江州刺史，作自讚，劔筓之像也。細川右馬廐寄紙需書，無字下書偈與之，因以宗鏡錄一部爲贖。

十三年辛丑

師年八十八歲，孟夏下淀，興新龍山正門及偏門，且築廢城，鹹銅池，畚鋪之役，徒侶汲然，檀度響合，仲夏之初成矣。七月十日設齋修門成之賀儀，孟冬朔瘡發，三日服驅瘡之藥，而瘡散矣，然衰憊喘々，殆焉，十有九日，江刺史來謁，對話如常，十一月七日疾病焉，水漿不入口，二十一日卯時，泊然如寢坐逝，晡時窆全身于慈楊之塔，遺命諸徒不得披麻祭典過儀，平日所述頌古偈贊等，編曰狂雲集，已爲人傳所稱，師之爲性，等慈莅物，貴賤一目，視敗夫鬻豎，不爲疏，遇待僧門生，不爲



親故童稚挽鬚而馴、烏雀就手而食、濟惠是喜、隨得隨與、嬉笑怒罵、潛鞭密鍊、生平意誓、縱雖得一箇半箇種草、吾必斷絕、况痛惡諸方咒銅羽養之風、而臨學者、彌辛辣、或有欲參請者、曰、吾已老矣、然逢其人、則百種施設、巧譬旁引、猶如常山、蝟餘尾擊應、是其緒餘而已、若其具佛祖大機大用、則縱雖僧家南董、吾恐一筆所不能紀云爾。

## 一休和尚傳畢

米峰和尚、突如書を飛ばして其の舊著の跋を徴す。凡そ著書に於ける他人の序跋は、著者の爲めにも讀者の爲めにも贅疣にして無用中の無用也。和尚豈之を知らざらんや。能く知つて而して余の跋を徴する所以、蓋し佛教のブの字も知らざる余の冗語の如きは、有るも可、無きも可、十目の見る處、和尚の著書をして決して重からしむる心配なきを安心して、料理のツマと同様に心得たるならん。

余は佛教のブの字も知らず、高僧傳の如きは風馬牛也。一休何人ぞや。殆んど知らざれども知らうとも



思はず。余の知れる一休は種員の假名反古一休双紙と京傳の醉菩提とに現れたる狂歌の器用な愛嬌坊主にして、今なら落語の前座が勤まりさうなれども、日本の佛教界に何を貢献したりしやを知らず。算盤を弾いて書物を安く賣る米峰和尚の方が二三割方エラさうに思はる。少くも一休を倅として飯粒と代へたる米峰は本來くふの極意を遙に辨へたりと云つべし。

去りながら肉食妻帯天下御免の今日の世の中、庫裏にクサヤの臭ひあり、墓場に襦袢の干したるあり、

坊主頭の直綴で新婚の大廂と手を引合つて縁日のそゞろ歩きするも珍らしからず、角刈の烏打脊廣で自轉車飛ばして檀家廻りをするビジネス宗あれば、本堂の片隅にピヤノを置いて女優の品定めをする藝術宗もあり、法華經よりは浪花節、碧巖よりはニイチエイズム、我れ本來木の股から生れたるに非ずと大悟徹底したる累々たる肉團々、一休生れ來らば何といふらん。

尤も戒行教相に倅はれて菩薩のやうな顔したるばかりが僧らしき僧に非ず、將た又檀家や講中との



取引を圓滿に處理するお寺株式會社の業務擔當員が殊勝らしき坊さんに非ず、さりとして僧と云はるゝを嫌ひて宗教家と稱し、袈裟ころもよりは洋服を着て、爺婆を相手に阿彌陀様の説法をするよりは青年男女を集めて本能主義と印度哲學との共通點や國體と佛教との關係を演説して在家だか僧侶だか解らぬやうな顔してゐるのが文明流の善知識にも非ざるべし。將來の佛教がどうなるか解らぬが、此鹽梅にてはセ、ツシヨン式鐵筋コンクリートの大伽藍、ポスト・アンプレッシヨニストの壁畫の背景にロダン張

の本尊さまを安置して、我々善男善女に切符の押賣をし、オーケストラのオーバーチュアに本堂を開扉し、燕尾服にメダルを下げたる大和尚が雲右衛門張りのお説教をする時代も決して遠かるまじく思はる。今の中に三十棒か三百棒でも啗つて冥土の旅に出掛けた方がまだく、浮ばれさう也。

一休、汝の骨は土となり茄子か南瓜の肥しとなつて了つたらうが、汝の人魂が若し何處かにフワリフワリとしてゐるならば聞け、汝元來鯨の如し、一生をヌラリクワリとして終りたれども折々鬚の尖きに



てチクリと刺す、汝若し教化の本願あらば菩提の爲めに地震となつて末世の僧を壓し潰せよや。

遮莫れ、釋師の張扇にまで叩かれたる汝、殺活自在機智縦横なる米峰和尚の茶の子となつて餓鬼の空腹を供養す、怎麼滴々墨汁裡萬朶花、氷雪原頭春光麗、佛出さうと鬼を出さうと氣隨氣儘の米峰禿顱の筆力汝は會せりや否や。一休枯髑髏となりて春風秋雨幾百年、水は流れて沉々、風は吹て颯々。

改元八月

魯庵生

跋

(一)

「一休和尚傳」を増版するに就て跋を書けといふ命令が米峰から下つた。米峰が何故に僕を選んで此命令を下したかの理由は、僕に分らぬ。然し外ならぬ米峰の命令とあつて見れば、只門外漢たるの故を以て之を辭する譯にも行かぬ。況んやコツチの門内の事には堅く筆を縛られて居る折柄である。筆淫の性として、こゝ暫く他の門外の事に差出口でもして見るより外は無。筆淫とは新熟語だが、そこが即ち賣文



社々長たるの資格である。と、こゝにもチヨツト賣文社の廣告をして置く。

## (二)

僕がソツト門外から窺いた所で、耶蘇教の人と佛教の人との間にこんな相違點がある。耶蘇教の人には押しなべて木仁參の趣きがあるが、佛教の人には大抵飄逸洒落の風がある。耶蘇教の人は兎かくキマジメに陥るが、佛教の人は随分俗惡に流れる。耶蘇教には溫柔な人が甚だ多いが、佛教には奇矯の人が決して少なくない。耶蘇教には折々一種熱烈の氣を帶

びた人を見るが、佛教にはヨク冷靜無頓着と云つた様な人を見る。

一長一短、一利一害、僕は耶蘇教の熱烈をも好み、佛教の飄逸をも愛する。然し何方かと云へばヒイキは佛教の方にある。

早い話が、一休の様な面白い型は耶蘇教には無い。

## (三)

新年おめでと、明けましておめでと、何がおめでたいやら分りもせぬのに、世を擧つて只おめでたくなつて居る時に、竹棒の先きにシヤリコウベを



突っかけて、都大路の家々の軒先に見せつけて、冥土の旅の一里塚と喝破した様な、痛快至極な振舞は、實に我が一休式の精髓であらうと思ふ。

無暗に祈禱が流行したり、猫も杓子も感涙に咽んだり、謹慎、恐懼、誠意、誠心が大安賣に成つたりする時節柄には、チト一休式の奇矯奇拔な奴が出て来て貰ひたいものである。

## (四)

所で、茲に跋の本题に踏入つて、米峰の「一休和尚傳」を讀んだ感じを云つて見ると、チト何うも眞面目腐

り過ぎて居る。尤も、九年前の米峰が今日程老熟して居なかつたのは當然で、今日米峰が「一休和尚傳」を書くならば、モ少し青くないものが出來たに相違ない。然し僕つらく、米峰今日の人物を見るに、老熟は乃ち之あり、奇は乃ち少しく足らず。

一昧米峰は俠骨を以て自ら任じて居る男である。固より彼れに俠骨はある。然し自ら任じて居る割合からすれば、まだ少し其の俠骨が足らぬ。

## (五)

序の事だから、僕をして少しく新佛教諸本尊の人



物を評せしめよ。

田中我觀は明敏にして樸實、僕殆んど間然する所を知らぬ。然し彼は決して新佛教の大本尊では無い。境野黄洋は正に新佛教の大本尊である。然し彼は「忘れ佛」である。飄逸にして洒落、冷靜にして無頓着、善く佛教者の一面の特色を現はしては居るが、彼や亦決して世と闘ひ人を刺す人物では無い。

杉村縦横即ち楚人冠は奇氣横溢、其質に於いて、其才に於いて、極めて見榮のある男であるが、彼や亦近來少しく營養不足、萎靡不振の感が無いでも無い。是

れ米峰が「新佛教」紙上に於て、彼を送つて印度に之かしまるの序を募集した所以である。

最後に我が米峰は如何。彼は正に新佛教の總支配人である。彼あるが故に新佛教は稍猶活動の氣を存して居るのである。彼あるが故に黄洋我觀の徒も亦大いに其の聲望を高めるのである。彼は確かに戦闘の人である。

(六)

と斯う持上げて置くのは、次に少しく米峰を落さんが爲である。彼れの新佛教に於ける地位は實に斯



くの如くである。彼れの任務は實に重大である。彼れの自負は實に高遠であらねばならぬ。然るに、前に云ふ通り、彼にはまだ奇氣の足らぬ所がある。

僕は必ずしも今米峰に對して、直ちに一休を學べと注文するのではない。然しながら、彼の一休式の奇矯奇拔が、善く佛教者一面の特色を發揮したものであるとするならば、我が米峰は正に此の方面に於いて、今少しく發揮する所があるべきだと思ふ。米峰以て如何と爲す。

あゝ、飛んだ者に跋を命じて飛んだ事を書かれた

ものだ。是も楚人冠を咒咀したりした報だと諦らめ玉へ。オット人事ではない、僕も疾うから覺悟して返し矢を待つて居る。

大正元年九月某日

堺 利 彦



## 跋

世一休を以て飄逸洒脫滑稽突梯以て人を諷刺するの快僧となす。焉んぞ知らむ、彼は其隠れたる半面に於て熱烈火の如き眞骨頭を藏するの多涙多感兒ならむとは。之を現代の武人に求むれば、梧樓三浦將軍の性格に髣髴す。將軍善謔善罵白眼一世を睥睨して、言ふ所往々人の願を解く。而かも將軍は峻嚴辛辣、一步も假借せざるの半面を有す。其忼々たる憂國の至誠より出づるや一のみ。

余曾て山城薪寺に於て、一休和尚肉付きの木像を

見る。眉目鬚髮、梧樓三浦將軍に寸分差はず。大に骨相と性格との宿契あるを奇とす。然る後數年、偶々高島米峰君に遭ふ。其骨相に於て梧樓三浦將軍の一休に似たるが如きに及ばずと雖も、其言動に至りては、君も亦一休の系統に屬すべき一人たるを認む。

斯人筆を執りて一休傳を著す。人の争うて之を珍重するや固に因なしとせず。今第五版を重ねるに追んで跋を余に求む。余曰く一休の木像を見んと思ふ者は山城の薪寺に往け。一休の肉顔を見んと思ふ者は富坂上に往け。若し夫れ一休の心肝を絞れる笑聲、



罵聲、哭聲、叱聲を聞かんと思ふ者は、少しは廻り路ても小石川の原町を訪へ。脚の草臥れし時、主人は腰掛を參らすべし、苦茗一椀、試に此書を把りて其會心の處を翻かば、有漏路より無漏路に還る一休み、其軀即ち知らむ現身の宗純なるを。………咄、這狼狽漢、蚤取眼で何處を探すぞ。

大正元年九月

佐々木照山

明治三十七年十月二日印  
明治三十七年十月五日發  
大正元年十一月五日增補第五版印刷  
大正元年十一月九日增補第五版發行

定價金九拾錢

著作兼發行者

高島大圓  
東京市小石川區原町六番地

印刷者

佐久間衡治  
東京市京橋區西紺屋町二十六番地

印刷所

株式會社 英舍  
東京市京橋區西紺屋町二十六番地



發行所

東京市小石川區原町六番地  
振替口座東京一五六八六番  
電話番町二六〇八

丙午出版社



文學博士 村上專精先生著

◎改訂自 信 錄 定價金六拾錢 郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實験を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にして「實在」と我れ「佛陀」と我れ「關係」より自力と他力の異同に及びて之を結ぶ五章七節説いて至らざるなく述べて盡さるる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし今や第六版を發行するに當り更に先生の改訂増補を得て先生の信仰に一大進歩あることを證したるのみならず全然舊版と面目を異にするを得たり震くは再讀の榮を賜へ

文學博士 村上專精先生著

◎女 性 訓 定價金四拾錢 郵税金六錢

本書の内容は天職中斷質素謙遜節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至り盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす

文學博士 村上專精先生著

◎誠 の し る べ 定價金四拾錢 郵税金六錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

アー、エフ、スタンツラー先生原著 エル、ピツシエル先生増訂

フクトル、フィロソフィエー 荻原雲來先生譯補

◎梵 語 入 門 定價金一圓 郵税金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし宗教の千慮萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし東亞文明の根柢を探らんとする人も梵語を學ぶべし

我邦一部人士の梵語を學ぶものもあるも彼等は或は歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんば第一歐語を學ばざる可からざる不便あり二第價格低廉ならず今以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

慈雲尊者風筆 阿滿得壽先生著

◎悉曇阿彌陀經 定價金一圓 郵税金八錢

北條蓮慧先生著

◎眞宗の教義 定價金貳圓 郵税金拾貳錢

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀 定價金七十五錢 郵税金八錢

曩に「吾國體と基督教」を刊行せし以來其批評續々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を擧げて讀者に其解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるるを得べしと信ず大方の君子重ねて批評せらるるともあらば幸甚

著者 敬白

ワイナー、フアイト氏原著

◎解說 倫理學原論 定價金五十五錢 郵税金八錢

ワイナー、フアイト氏の「倫理學原論」は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を説きしものにして理論的に卓抜の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を捉へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の翻譯によりて已に紹介せられたるあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾としこれが解説を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順を追うて始と各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ讀過筆録の際單見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり

購讀者 敬白

文學士 渡邊又次郎先生著

◎最新論理學 定價金一圓廿錢 郵税金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述する所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

新公論社編 ○附錄學生鎖夏法

◎男女學生氣質 定價金二十錢 郵税金二錢

此書は坪内雄藏、柳橋鞠子、幸田露伴、村上專精、三輪眞佐子、佐治實然、山崎ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黒忠憲、運家麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、柳橋一郎、寺田勇吉、フオスター、坂本盛徳、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島徳藏、下田次郎等の大家が、現今男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり

文學博士 高楠順次郎先生 曹洞宗大學教授 立花俊道先生著

◎巴利語文典 定價金一圓 郵税金八錢



京都帝國大學文科大學長 文學博士 松本文三郎先生閣並序  
京都帝國大學文科大學副手 文學士 羽溪了諦先生新著

◎釋尊の研究 定價金 壹圓 郵税金 八錢

著者は帝國大學出身にして陛下恩賜の銀時計を拜受したる秀才なり  
今や大學院に在りて専ら釋尊大悟界の研究に従事す本書は實にその  
近業たり筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸  
學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀  
人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移り  
こゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の  
議論を破る誠ニ教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱  
すべし殊に松本博士は嚴密に校閲の勞を執りて研究上の責任を分つ  
本書の權威以て知るべきにあらずや

東京帝國大學講師 文學士 常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳 定價金 七拾錢 郵税金 八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹  
殺して顧みざるべしと雖もこれ等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支  
配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなるべし此  
著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系  
の相違を比較對照し以てこの千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へ  
むとするに在り著者常盤大定先生夙に佛學能文を以て聞え殊に佛傳  
の研究に従ふものこゝに年あり此書の價值蓋し推知し得むか

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著  
慶應義塾大學講師

◎達磨と陽明 定價金 七拾五錢 郵税金 八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學  
の眼目を豁開して條羅なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神練  
磨人格養成等一として備はざるはなし眞に是れ精神界の指南針にし  
て亦實踐徳道の指導者たり

慶應義塾大學講師 忽滑谷快天先生評釋  
曹洞宗大學講師

◎和漢名士參禪集 定價金 五拾錢 郵税金 八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時  
頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家徳川家康正成等古今の名臣支那に於  
ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張  
無盡裴休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する選語  
美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供  
する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と驛々商榷し名僧  
大徳の錯雜に接するを得しむ

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎寒山詩新釋 定價金 五拾錢 郵税金 八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるは寒山詩なり是れ  
語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるは寒山詩なり是れ  
なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者清潭大の學と才と  
を以て一筆勿斷彼が面目こゝに於ても露出す寒山詩神を知らむと欲  
するものは須らく此書を以て指南軍となすべし

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎訂偉人の跡 定價金 壹圓 郵税金 八錢

古今東西の偉人十人を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功  
過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉  
人の眞面目は躍如として茲に活動する人若し偉人とは如何なる者か偉  
人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は  
死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せ  
ば莫くば偉人の偉著に問へ

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎小泡十種 定價金 四拾五錢 郵税金 八錢

博士の學殖富時に博士の見識卓越に博士の文章超凡なること世既に  
定評あり今この學と識と文とを倒してこの著を作す政治を論じ宗  
教を説き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては浩渺盡  
きざる大河となり散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋  
し近代稀有の快著なり

文學博士 井上圓了先生著

◎西航日録 定價金 拾錢 郵税金 四錢

是れ井上博士の洋行土産なり歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等  
の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す  
征鏢の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民はまた世界の  
大勢に通ぜざるべからず請ふ一本を購へ

東北大學總長 文學士 澤柳政太郎先生著

◎退耕錄 定價金 壹圓 郵税金 八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたる  
も尚ほ腹ふくる心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書  
は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるもの  
なるを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり警拔  
にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲す  
る所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國憂世の大文字なり經  
世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

東京高等師範 文學士 亘理章三郎先生新著  
學校講師

◎王陽明 定價金 壹圓半錢 郵税金 十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く人生問題に觸着して幾多の煩悶を  
重ねたりしなり或は劍に仗つて赫々の武功を建てむとし或は筆を揮  
つて噴々の文名を馳せむとし或は青雲に攀ちて功名富貴に飽かむと  
し或は聖賢を學んで天下第一の人たむとし而して事毎に理想と現  
實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりしなりしかも能く自ら百般の  
問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこ  
の王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併叙し依つて以  
て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の  
範としたるものなり恐らくはこれ王陽明に關する凡百の著書中最も  
斬新にして且つ精細を極めたるものたらむ



東京帝國大學教授 文學博士 高楠順次郎先生著

### ◎國民と宗教

定價金七拾錢 郵税金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博の學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳述せられたる新著なり苟も日本の國民たるもの日本の宗教家たるものは 讀せざるべからざる 佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演説講話の好模範たるべし。

◎附録として研究上修養上極めて重要な論文十編を收む 此れまた實に學界及教界の珍たり。

黑岩周六先生講演 丙午出版社編

### ◎人生問題

定價金五拾五錢 郵税金八錢

人生とは何ぞや 是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に 苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を採り大に其深趣を得て 茲に此書あり叙る所神の有無に始まり 人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光るる人生に觸着することを得ん。

第三高等學校教授 文學士 野々村直太郎先生著

### ◎宗教と倫理

定價金五拾錢 郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道徳論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に憐れめるもの知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と新道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。

◎附録、二宮尊徳翁の宗教觀を評す。

文學博士 松本文三郎先生著

### ◎宗教と哲學

定價金四拾五錢 郵税金八錢

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道徳研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論議にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は 此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり。

マクス、ミュラー博士原著

文學士 清水友次郎先生譯

### ◎宗教學綱要

定價金五拾五錢 郵税金八錢

清水學士佛敎大學に教授として、宗教學を講ずるや 近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり。

前外務大臣 伯爵 林董閣下序  
東北大學總長 澤柳政太郎先生序

### ◎修養史譚

櫻所 干河洋一先生編  
定價金壹圓 郵税金八錢

林伯爵曰はく「此の書を續くに古今東西の史乘より異世同儕の事實二百對を擧げたるものにして 教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たむ」と。

澤柳東北大學總長曰はく「道徳上の實行を期するには先づ之を實行せむとの意志を起さしめることが必要であるそれには人の感興を惹くべき實例を示すのが最もよいしかしその實例を示さうとなると適當なるものが極めて少ない本書の著者は博覽強記能く適當なるものを寛め來りて其の數頗る多く修身教授上の材料として有益なるものあるを覺ゆ」と。

東北大學總長 澤柳政太郎先生序

スタンフォード大學總長 ジョルダン博士著  
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

### ◎人物の修養

定價金五拾錢 郵税金八錢

ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるる紳士なり我國人がその所説その意見を知むらと欲するの情並に之を知ることに依て利すること渺からざるは言を俟たず大方の君子希くは本書に對し尊敬と同情とを表して博士に報ゆる所あれ。

前外務大臣 伯爵 林董閣下纂譯

### ◎修養の模範

定價金七拾錢 郵税金八錢

今の人何故に修養せざるべからざるかを知らざるもの少しと雖もその如何にして修養すべきかに至つてはこれに迷ふもの頗る多し本書は主として古聖賢が如何に修養したるかを教へんがためその義理逸話を纂譯したるものなれば以て青年自修の良師友たるべく以て敎育家宗教家が講壇に用ゐる例話の寶庫たるべし。

東洋大學講師 境野黃洋先生著

### ◎增補聖德太子傳

定價金五拾五錢 郵税金八錢

佛敎史家として夙に命令ある境野先生が其の濃厚なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛敎の教主たる聖德太子の事蹟を敘述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其匹を見ざる所。

關西哲ポール、ケイラス先生著 鈴木大拙先生譯

### ◎阿彌陀佛

定價金參拾五錢 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや 是れ佛敎の根本問題也ケイラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たるや 弊社に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり 豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや。



京都帝國大學 文學博士 松本文三郎先生著

◎彌勒淨土論 定價金 壹圓 郵税金 八錢

宗教上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面に「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるものその他半面は彌勒淨土の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の著者極樂淨土論と相俟つて並に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談ぜんとするものぞ。

加藤咽堂先生著

◎原人論講話 定價金 六拾錢 郵税金 八錢

佛敎典義多しと雖も、大小二乘の教旨を網羅し、其の要を摘み粹を抜き、優劣を判じ、淺深を論じ、人生の根本たる先生の問題を解決し、之れを儒道二敎の教義と比較して、佛敎の嶄然一頭地を抜き所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし、本書は著者が獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し、且つ近代思想を以て批評を加へ、龍頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば、佛敎の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし。

文學博士 姉崎正治先生閣下推讃 文學士 矢吹慶輝先生著

◎阿彌陀佛の研究 定價金 二圓 郵税金 拾貳錢

上下二千歳の史實と高僧悟徹の活事蹟とを有し現に宗教的活力を蒙りて佛敎の他力的方面を代表するものは實に阿彌陀佛の信仰なり阿彌陀佛とは何ぞやその信仰本來の面目を明にしたるものは本書なり世の他力往生の信者は勿論夫の原始佛敎の自力主義が如何にして他力佛敎を生ぜしか慈悲本願の教主他力回向の信仰は佛敎史上如何なる旨趣を有するかを知らむと欲する者も亦此書を讀まざるべからず。

宅雪嶺先生序 咄堂 楚八冠 尙江三先生跋 結城素明 平福百穂二畫伯畫 高島米峯著

◎廣長舌 定價金 七拾錢 郵税金 八錢

加藤咽堂先生曰はく「米峯今胸中鬱鬱の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の旨は所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々鬱鬱の大字」と。 杉村楚八先生曰はく「米峯の文を屬するや一氣呵成にして而かも理路井然たり才華瀾灑たり細穿たらざるなく徹打たずんば已まず米峯の筆を執るや政治に涉り文藝に及び宗教に關し教育に係り趣味の廣汎に至つては誠に行くとして可ならざるを見ず」と。 著者曰はく「獲められて嬉しがれる程の初心ならざれどもたゞ當世慣用の廣告手段はかくもあるべし」と。

島田三郎先生序 高島米峯著

◎理想的商業 定價金 貳拾五錢 郵税金 四錢

商業とは畢竟物を買ひたいといふ人に賣つて遣はすといふほどの事なり買ひたいといふ何とも言はざるものに賣らうとするが如きは是れ豈無理の甚しきものならずや今の商人平氣でこの無理を行ふこと、に於てか百弊起る夫のお客様といふもの、無暗にのさばり返るも是がためにして商人の矢鱈に侮蔑せらるるも亦實に是がためなり賣るに法あり買ふに道あり、この法を説きこの道を教へてお客様といふもの、立場を明にし以て商人といふもの、位置を高め而して買ふ者にはうんと買へと勧め賣るものにはしつたま買れと告ぐるものは即ちこの書なり但し讀みたいといふ人に讀んで貰はふがために書いたものにしてもとより讀まうと思まうと思はないものにて讀ませやうといふやうなそんな不所存は毛頭これなきものなり。

堺利彦先生新著

◎樂天四人 定價金 六十錢 郵税金 八錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、殘忍、無耻、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て卒直に露骨に赤裸々に發揮せる者、之を一言にすれば社會主義者の安心を語る者……毫も危險の恐なき快著也

文學博士 村上專精先生著

◎通俗養論 定價金 壹圓 郵税金 八錢

修養に關する著書古今東西を通じて汗牛充棟も當ならずと雖もその理論を説けるものは高遠に過ぎその方法を教ふる者は煩瑣に失し共に探つて以て吾人が日常の行動云爲に資するを難しとす今吾が村上博士に見るありて古聖實踐の芳躰を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依つて極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だ有らざる精到完備の修養書たらむなり。

幸徳秋水が最後の文章

◎基督抹殺論 定價金 七拾錢 郵税金 八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も撰つて天地の容れざる大逆無道な企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に呻吟せるの間特に、この一巻を著す所論精絶快絶行文悲絶情絶特にその史的人物としての基督の存在を非認し十字架が生殖器の表號の變形たるを斷ぜるところ骨を刺し肉を刺りて世界の大聖基督をして殆ど完膚なからしむ洵にこれ宗教史上の一大発見なり嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふところあつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ子が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を蒙ふ。



賣文社長 堺 利彦先生新著

◎賣文集 定價金壹圓 郵税金八錢

卷頭之飾 著者の友人先輩、三宅雪嶺、福田徳三、花井卓藏、伊藤痴遊、徳富蘆花、島村抱月、杉村楚人冠、田岡嶺雲、木下尚江、加藤咄堂、伊井容峯、安部磯雄等六十餘名が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇技痛快の評語

堺 利彦先生譯

◎自傳 赤裸の人 定價金九十錢 郵税金八錢

佛國の革命はルソウの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソウの「エミール」によりて啓蒙せらるる波瀾重疊神出鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘す處なし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとする者は津識能文の堺利彦先生なり一讀してルソウ前に立てるの感起さしむ

加藤咄堂先生新著

◎筆と舌 定價金七十錢 郵税金八錢

筆舌生活二十年の經驗を基としてと演説文章との秘訣を語り模範を示したるもの

明楊起元評註 加藤咄堂先生和譯

◎和譯維摩經評註 定價金七十錢 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して新經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍註を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び譯を談ぜむと欲する者には勿論讀本として亦最適當なり

暮村隱士 久津見藏村先生著

◎眞人偽人 定價金一圓 郵税金八錢

先生書を著すこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か瘡癩を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥がるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

無我愛主筆 伊藤證信先生新著

◎新氣運 定價金八拾錢 郵税金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈訕笑輕侮憤懣の中に立ち臨面なく忌憚なく無我の根本真理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

文學博士 遠藤隆吉先生新著

◎孔子傳 定價金壹圓四拾錢 郵税金拾貳錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深遠なる識を傾け偉大なる筆を揮つてこゝに東亞の大聖孔子を傳すと言はば敢て又別に時流の廣告的文章を列ぬるの要なかるべし試みに少しく言はんかその涉極極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ歟は東洋學術の精髓を味はむと欲する人靈界の偉人に接して修養の資を得むと欲する人悉く來つてこの空前にして而して唯一なる「孔子傳」を讀め

フエヒネル先生原著 第三高等學校 教授文學士 平田元吉先生譯

◎死後の生活 定價金五拾錢 郵税金八錢

フエヒネルは哲學史上特筆大書せらるる十九世紀の鴻儒にして、實に今日の經濟的心理學、經驗的美學の基礎を置きし者たり。「死後の生活」は此經驗的傾向の大哲學者が、現世の事實を基とし、最高の詩的想像を交へ、或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる、詩と科學との靈妙なる融合なり、氏の説を以てせば、千里眼、幽靈等の不思議なる現象も容易に解釋することを得。故に本書は親愛者を失ひし人、死生の疑惑に苦しめる者に無二の慰藉となり、一般の讀者に津々たる興味を領ち、又學者研究者に豊富なる暗示刺戟を興ふるや疑ふ可からず。廣く江湖の愛讀を望む。

ベックマン先生著 杉村縱橫先生譯補

◎改訂強肺術 定價金四十錢 郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の肺力養成法を讀め此書に六の特色あり。第一、費用を要せざること。第二、時間を要せざること。第三、場所を要せざること。第四、努力を要せざること。第五、言文一致なること。第六、總ふり假名付なること。故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に理解し容易に實行し而して確實に其功を收め得べし。

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎和漢名詩新釋 定價金五十錢 郵税金六錢

本書は、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉たり、和は虎關以來絶海巖堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるなり、其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨とし深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此の如きもの恐くは曠前なるべし。

文學博士 村上專精先生編

◎註原人論 定價金十二錢 郵税金二錢

◎註大乘起信論 定價金十六錢 郵税金二錢

右の二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり。



文學博士 井上圓了先生新著

### ◎活佛教

定價金壹圓拾錢  
郵税金八錢

日本現存の佛敎は悉く大乘佛敎なるにも拘らずすべて小乘の歴世の風を帯びて人生を悲觀し到底今日の社會に存在すべき價なきのみならず又實に生きたる人間の救済には全然無力なる死佛敎にして人類の幸福國運の發展の如きもとよりこれに望むべくもあらず井上先生護法の至情自ら禁じ難くこゝに一大革新の名策を立て從來の死佛敎を蘇生せしめて活佛敎となし大乘の眞面目たる世間的活動の大精神を發揮せしめむとして遂にこの著を成す實にこれ「佛敎革新論」也「護法活論」也夫の明治年間に於て宗教界と思想界とを震駭せしめたりし先生の名著「佛敎活論」は既刊の「序論」「破邪活論」「顯正活論」と及び此の著を以て全部の完成を告ぐ彼を讀みて啓發せられたりし人も此を讀むべく未だ彼を讀まざる人も亦此を讀まざるべからず殊に大に活躍せむと欲する僧侶大に寺院を興隆せしめむと欲する僧侶は此書について學ばざるべからず

文學博士 井上圓了先生新著△空前の大旅行記

### ◎南半球五萬哩

定價金九拾錢  
郵税金八錢

本書は井上博士が南半球を一週し赤道を四週し濠洲南南米各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで過る處の山容水態國情民俗の荷も眼窓に映し耳朶に觸れたる珍奇怪異の現象はこれを詳記して漏さず殊に各地の景色風俗等の寫眞版數十個を挿入したれば讀者は座ながらにしてしかも五萬哩大旅行の途に上りつゝあるの思をなすむ實くばこれを以て夫の當世流行の假作的冒險譚空想的旅行記と同視すること勿れ

加藤弘之先生序 境野黃洋君跋 高島朱峯著

### ◎惡

定價金八拾錢  
郵税金八錢

加藤弘之先生曰はく「著者は新佛敎社にありて該雜誌に隨分奇抜なる論を吐き盡きには「廣長舌」を著して忌憚なく社會を罵倒し今又「惡戰」を著して倍々世を顛弄すされど世を憂へ國を愛する至情は自ら其中に溢流して居る蓋し青年立志の指針たるに足らん」と著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

ウキリヤム、ハイド氏原著 澤柳政太郎氏序 鈴木秀太郎先生譯補

### ◎修養自己測量

定價金五拾錢  
郵税金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の終極法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に應むとするもの他なし吾人が惡徳邪癖の癡人性格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓なるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の秘庫を開くべき鍵はこゝにあり

## 村上博士、島地學士序、藤井瑞枝女史新著

# 亂れ雲

定價金八十錢  
郵税金八錢

女史は學海の先覺藤井宣正氏の未亡人にして夙に文才と俠氣とを以て知られ或は明治の清少納言と呼ばれ或はその久しく清水港に在りしよりして女次郎長と稱せらる「亂れ雲」一卷一面よりこれを見れば女史が詞藻集なり氣焰録なり他面よりこれを見れば女史が舊組織舊道徳に對する呪咀なり叛逆なり輕妙にして洒脫なる女史の筆致と大膽にして痛快なる女史の面目とが如何に女離れのしたるかは此書に於て看取するを得む

明楊起元評註 加藤咄堂先生和譯

## 和維摩經評註

定價金七十錢  
郵税金八錢

本書は明の揚起元が評を如へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最適當なり



加藤咄堂先生新著

▲通俗講話者の寶典

# 通俗講話の理方法

菊判 箱入  
定價 九十錢  
郵稅 八錢

通俗教育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解説し多くの例話を擧げて其の用法を示されたるものなれば教化の祕訣雄辯の奧義講話の資料收めて一巻の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一個理想的の通俗講話者たるを得む



78  
144



終